



中屋サワ遺跡における縄文時代の川跡について

谷口 宗治（金沢市埋蔵文化財センター）

1. 概要

手取川扇状地の末端部にあたる。中屋川のほか、中小の河川が流れている。現在の地区名は「安原」であるが、元は「八州原」と呼ばれ、細い微高地が連続していた。現在は海岸線から約3km離れている。遺跡の近隣には東大寺領横江庄遺跡（昭和47年国指定史跡）、上荒屋遺跡（平成4年県指定史跡）、新保チカモリ遺跡（昭和61年国指定史跡）、御経塚遺跡（昭和52年国指定史跡）などがある。

調査着手以前は水田地帯であった。工業団地造成を起因とした発掘調査である。当遺跡は平成2年に市教育委員会により発掘調査を実施している。

2. 川跡と木組み遺構

調査箇所でもっとも東の区画から縄文時代後期から晩期にかけて機能した川跡を検出している。晩期中頃（2,300年前）の下野式、宮竹式を川跡の最上層で検出した。最下層では御経塚式を検出しているので、遺跡の最上限と判断した。川幅は4～6m、深さは1.6～1.8mを計測し、横断面は逆台形を呈する。川の堆積土砂は暗黒褐色の粘質土と青灰色粗砂が互層を呈し、所々に大量の堅果類の被子が袋状に堆積する箇所によって構成される。遺物の殆どは粗砂と被子類の堆積層から出土している。堅果類は主にトチ、クリが多く、クルミ、カシ、ナラ類は少ないという傾向がある。被子のほとんどは破断した状態で、食用に供した残滓と推測できる。川岸からは径1m内外の土抗が10基以上見つかри、中にカシ・ナラ類が堆積するため「ドングリビット」と判断した。

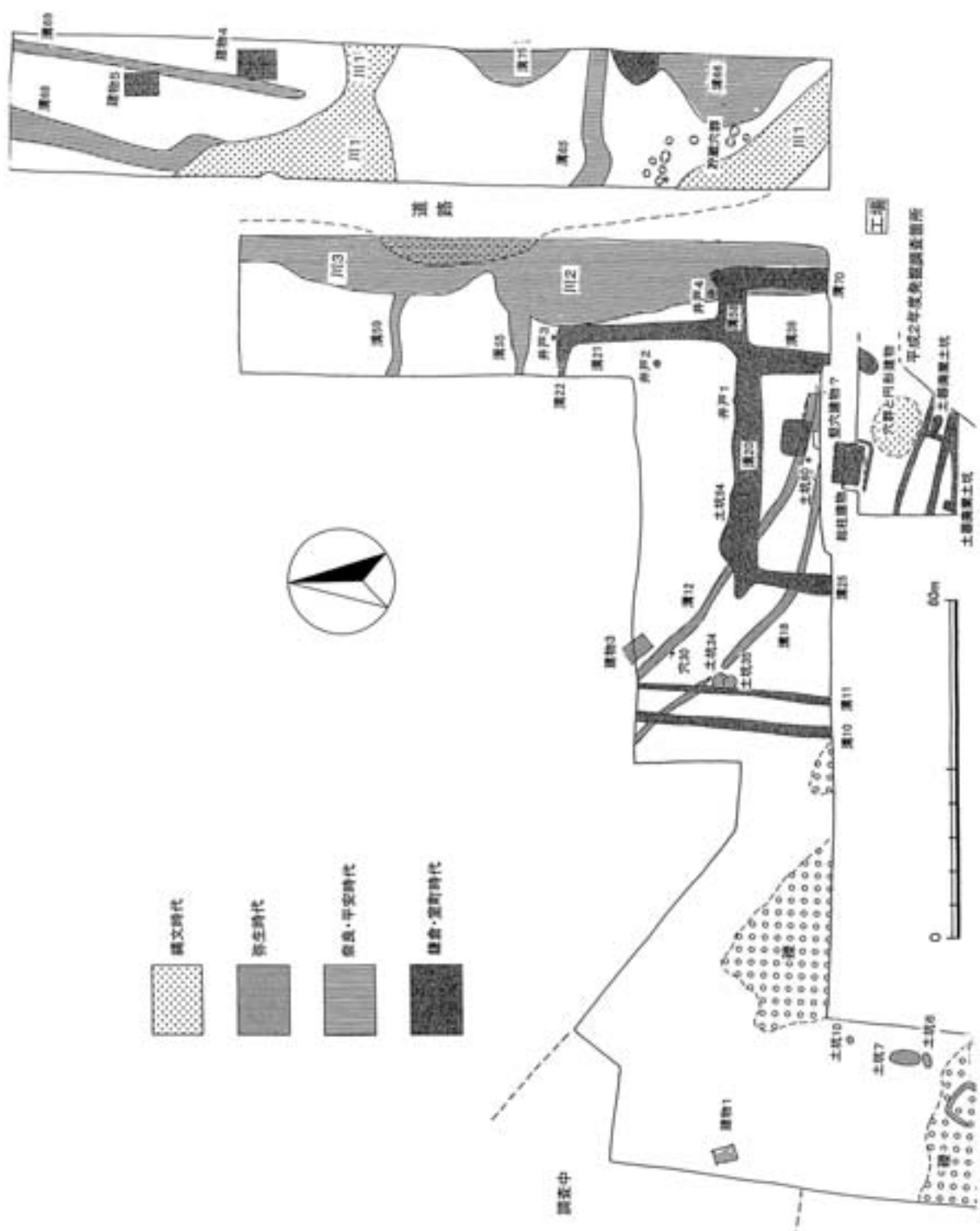
川跡の中央部で「木組み遺構」を川の中層より下位で検出している。「木組み遺構」は、川の中央に大型の木材を流路の方向に沿って配し、中州を人工的に構築したものと、右岸から小さな木材を打ち込んだ杭列によって連結し、右岸には中州と規模のよく似た木材で渡場を設けているものを総称した。大型木材は全て広葉樹の加工木で、丁寧に面取りを行った材を使い、堅牢に作られている。「木組み遺構」は上下2面あり、造営は2回行われたと推測できる。上面は中屋式期の土器とともに露出し、下面の木組みの間から御経塚式期の深鉢を検出しているので、それぞれの時期を比定した。

3. まとめ

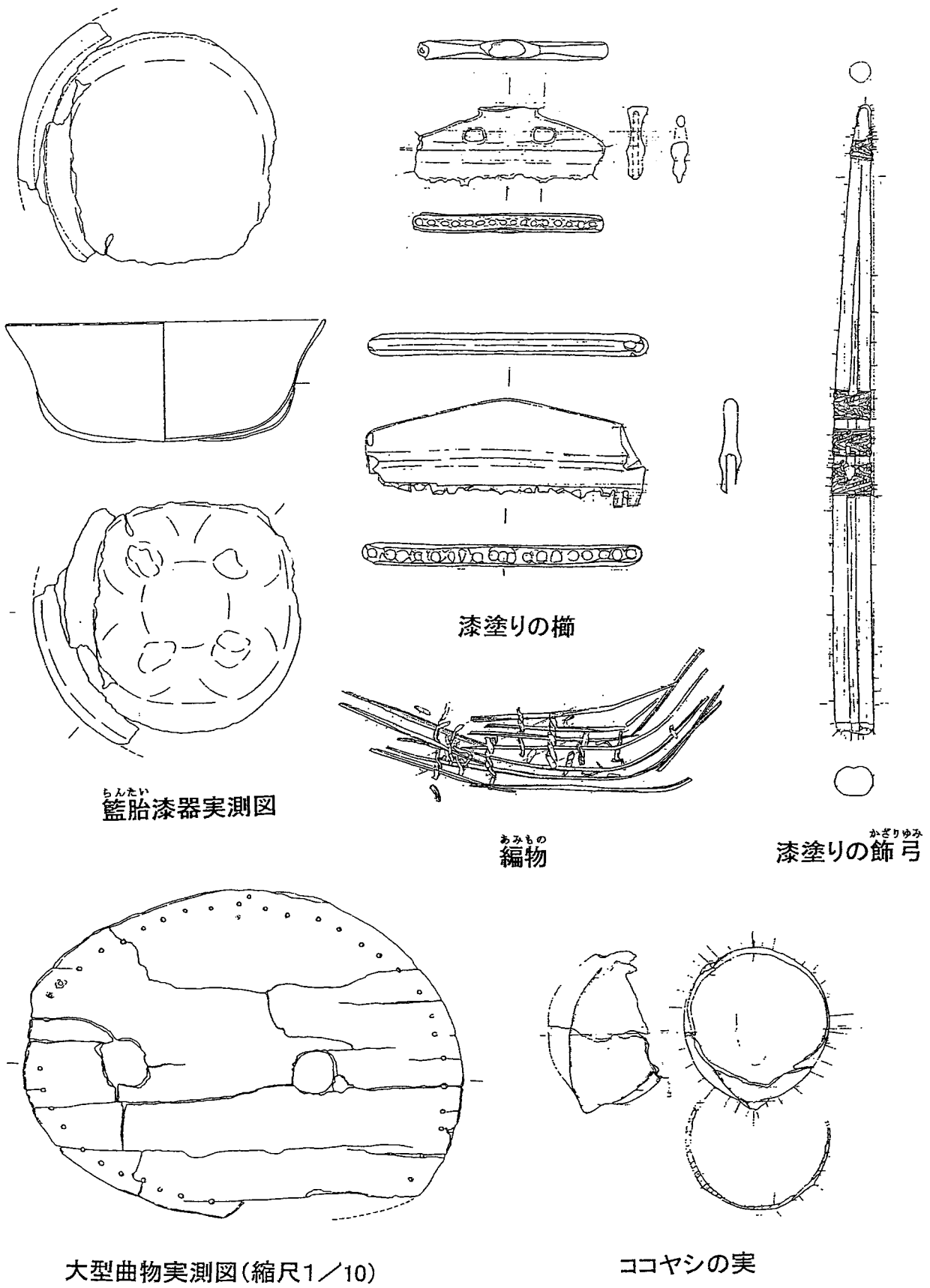
川跡から縄文土器、石器、木製品などを検出している。総数はコンテナで500ケースを超える。精製土器は御経塚式と中屋式で8割を占める。粗製土器には「煮焦げ」と判断できる付着物がある。土器の組成は深鉢、浅鉢、注口土器、壺形土器の順に多く、蓋、土偶、耳栓なども確認している。

木製品は弓、編物、容器、曲物、櫛、腕輪、藍胎漆器などが出土した。藍胎漆器は保存処理と復元の結果、国内で最も遺存度がよいことがわかった。曲物は樹皮を利用した製品で、処理の結果、2枚の樹皮から構成され、間に編物を挟んでいたこともわかった。

当遺跡は縄文時代の住居跡を検出せず、川跡から遺物が出土するのみで、遺跡については漠然とした所見を述べるしかない。しかし、土器・石器の出土量が多いこととあわせ、木製品の残りの良さや出土量の多さなどは、当該時期の他遺跡を凌駕している。木製品の利用形態について貴重な情報を提供した遺跡であることは間違いないであろう。



第1図 中屋サワ遺跡主要遺構概略図



第2図 川1出土遺物実測図(縮尺1/4)